

**1◆タイトル**

米屋本屋女子大生

**2◆サブタイトル**

まちとつくる好きな店

**3◆キャッチコピー**

やろうよ、地域でのチャレンジ

**4◆企画内容**

これからの生き方や暮らし方に迷うすべての大学生に贈る、休学して米屋と本屋を始めたある女子大生の奮闘記録。

私は東京出身で東京の大学に通う大学生。

中学、高校で部活や行事に励み、勉強も頑張ってきた私は、自由に好きなことができる大学でも、興味を持ったことはほとんど全部に挑戦してきました。サークル、アルバイト、ボランティア、学生団体、留学、旅行、畑など、それまでとは比べ物にならないほど広がる未知の世界に飛び込んで「頑張る」を繰り返していました。

ところが、大学 3 年の 11 月に出会ったある人の言葉をきっかけに、私は初めて「頑張る」という方向ではない、理由の説明できない選択をしました。

それは、「休学してお米屋さんをやる」ということ。

不安と後ろめたさでいっぱいになりながらも、自分の心の奥底に問いかけて決めた、確かな選択でした。

お米屋さんをやる場所は、新潟県のある小さな町の商店街。もちろん、その町に住みながらするのです。

何が何だかわからないうちに、同じ商店街で「本屋さん」にもなることになった私は、人生で初めて、「なじみのお店」を持ちました。

そこには、季節を感じながら過ごす豊かな日常と、「わたしのままでいいんだ」と思える何かがありました。

私が「米屋本屋」をやりながら経験したことと、そこで感じたこと、気づいたこと。きっとどこの大学生でもできる、明日を楽しく生きるための小さな行動たち。

ノウハウやスキルではないけれど、もしかしたらこんなものが大事なかもしれない、といういくつかの学び。

そんなことを、これからどんな風に進んでいこうか迷っている大学生に届いたらいいな、と思いながら書きたいと思います。

**5◆企画者名**

井上有紀

## 6◆企画者プロフィール

私は 2015 年 4 月に明治大学を休学して新潟県新潟市内野町に住み始めました。その町の老舗のお米屋さんと共に「つながる米屋 コメタク」<http://kometaku.net/wp/> という 3 人の団体に活動しました。若い人に地域と暮らす豊かさを伝えるべく、ネットショップを立ち上げたり、お米屋の改装ワークショップを行ったり、毎週朝ごはん会を開いたり（県内のテレビに取り上げられました）しました。

本屋さんの方では、2015 年 4 月から 2016 年 3 月まで「ツルハシブックス」<http://www.tsuruhashibooks.com/> という本屋で運営メンバーとして活動していました。同じ町内に 2011 年にできたこの本屋は、中高生と地域の大人が本を通して出会う場として 10 名ほどの大学生や社会人で運営してきた本屋です。この本屋の立ち上げ人である西田卓司が私が内野に来たきっかけであり、私は 1 年間スタッフとして 30 個以上のイベントを行い、200 人以上の人とここで出会いました。

上記の 2 つの場所でメインプレイヤーとして動いた経験が、今回の本の主な内容となります。

自身の経験の記憶のほか、新潟でお世話になった町の人やコメタクやツルハシブックスは今でも深く関わっており、毎日 1 度はやりとりしているほど近い関係なので、取材や事実確認もスムーズにできるかと思います。

また、もともと文章を書くことが好きで、中学時代から 1 年に 1 冊ペースで日記を書いたり、高校 1 年生のときに株についての作文で優勝したりしていました。新潟で活動した 1 年間は、ほかのメンバーと共に運営しているブログで 100 本程度の記事を書きました。ブログの内容は、主に新潟での経験の中で気づいたことや学んだこと、感じたことで、今回の執筆にあたって大いに参考になる資料であると考えています。

## 8◆読者ターゲット・読者メリット

読者ターゲット：

メインターゲット：大学生。就活や留学などについて「みんな」が言う正解の道と「じぶん」が思う好きな道のはざまに迷ったり揺れたりしているような人たち。

サブターゲット：大学生以外で、好きなことややってみたいことがあるけれど、それをやるのが正解かどうかわからない、というような思いをもつ人たち。また、なじみのある地域やかかわっている地域がある人で、その町をもっと好きになりたい人たち。

読者メリット：同じような立場にあった「普通の」人の実際に思い切ってやってみた経験を知ることによって少しでも勇気づけられたり自分が感じていることに自信を持てるようになること。暮らしの中の小さな行動でも十分感性を磨くことだと知り、小さな行動を始められるようになること。

## 8◆企画のねらい

この企画を通して働きかけたいことは2つあります。

ひとつは、企画の内容や読者ターゲット・メリットの記載からもわかるかと思いますが、大学生の経験と感じた事がかかれた本を読むことで、大学生を中心とした「自分が正解に向かっているのかどうか」などに対して不安や辛さを覚えている人が「ありのままの今の自分が持っている感性を信じるのが大切なんだ」「そしてそれは暮らしの中の小さなことでもいいんだ」と思ってもらいたいことです。これは、実は本の中に出てくる「つながる米屋 コメタク」や「ツルハシブックス」の活動の目的にも近いもので、それを実際に立ち上げたり運営をした経験を書くことができるので、伝えられるのではないかなと思っています。そして、そう気づけた人たちが小さくてもいいから何か行動を起こしてもらえると嬉しいです。

ふたつめは、この本によって記録ができ、活動を振り返ることができることによって「ツルハシブックス」や「コメタク」、町で活動している人たちがますます活動に励んだり積極的になることです。「ツルハシブックス」は5年間、「つながる米屋 コメタク」は1年半ですが、多くの人に影響を与えたにも関わらず、広くその魅力が発信されることはあまりありませんでした。もちろん、同じように地域の人のつながりの中で活動している人は全国にたくさんいるので、その人たちの励みにもなったらうれしいです。

## 9◆企画の背景

今、就職や年金、結婚、キャリア形成などについて焦ったり不安に思っている大学生がたくさんいます（マイナビアンケートによると、「絶対に就職したい人」が9割）。一方で、地域・地方での暮らしやライフスタイルに興味をもつ人が増えています（農林水産省のデータによると、都市住民の3割が地方農村で住みたいといっている。また、移住相談は年々増えている）。

このことから、自分の幸せの在り方を自分の「感性」で決めるのか、より安定していそうだが、というような理性で判断した道に進むのか、その狭間で揺れている人が多いことが考えられます。

下北沢にあるB&Bというブックカフェにて行われた、「パラレルキャリア」（ナカムラクニオ著）という、自分の好きなことでいくつかの仕事をしながら自身の幸せを大切にすることを説いた本の出版記念イベントには、大学生や転職を考える20～40代が50人近く集まっていました。

東日本大震災がまだ記憶に新しく、経済的効率性や成長型の思考に違和感を抱き始めている人が多い中で、自分の考える感性や本当の幸せに確信を持つことができるような本が売れるのではないのでしょうか。

## 10◆類書との差別化

・「今日もていねいに。」松浦弥太郎著（「暮らし」の大切さなど、伝えたい内容が似ている）

## 第12回出版甲子園

→ 書いている人が大学生ということ、実際の体験を細かく書いているということで差別化

・「僕たちは島で、未来を見ることにした」巡りの環（地方地域に移住し団体を立ち上げた人の話）→ 読んでほしい対象と書いている人が大学生だということでの差別化

### 11◆企画者の要望:

はたらきかた・暮らし方・地方などのキーワードをもつコーナーに置いてもらいたいです。  
(イメージの写真)



### 12◆構成案

#### 第一章 「はじまりは、寄り道」

→ 大学3年生の11月にある人に出会ってから米屋本屋を始めるまでのことを書きます。きっかけは、大学のゼミの実習の帰りに、「せっかく新潟まで来たんだから」とちょっと「寄り道」したこと。その「寄り道」で出会った真っ赤な服を着た本屋の店長の言葉に惹かれ、私は来たる大学4年の年を休学して新潟に移り住むこととなります。大学3年、これからの人生を考える岐路にとんでもないものに出会ってしまった私の、葛藤と決心の物語です。

#### 第二章 『好き』と『隙』を増やす米屋」

→ 私が内野に来る一番の理由だった、商店街のお米屋さんと大学生をつなげる「つながる米屋コメタク」の活動について書きます。同じように県外から移住し一緒に活動した2人と意見が一致したのは、「丁寧に暮らしたい」ということ。でも丁寧な暮らしってなんだろう？と思ったときに、内野の商店街の老舗のお米屋さんに出してもらったごはん、そのときのお米屋さんの空間が思い浮かんだのです。

1年間の活動は、ネット販売や改装、祭りでのおにぎり屋さんや料理教室など本当に様々。でも一番伝えたいのは、このお米屋さんに通った日々の何気ない豊かさの

## 第 12 回出版甲子園

ことかもしれません。

### 第三章 「人生の岐路に寄る本屋」

→ 私が内野に来るきっかけになった本屋「ツルハシブックス」は少し不思議な本屋でした。20代までしか入れない真っ暗な地下室に、一人一つの木の箱に自分の作品を並べられるコーナー、ライブやご飯会、読書会などのイベントに、突然始まる進路相談や恋愛相談…

4月に移住してきた私は、ひょんなことからこの本屋の運営をする「店員サムライ」になることとなります。この本屋での毎日には想像以上にたくさんの物語がありました。その物語に直面するたびに、私にも小さな変化が積み重なっていくのでした。

### 第四章 「帰る町と暮らす町」

→ 1年間の休学を終えて、東京に戻ってきた私が、新潟で暮らした1年間を振り返って、特に自分を変えた気づきや学びについて書きます。

米屋本屋を続けつつも授業や就活に時間を割かなくてはならない中で、久しぶりに会う東京の大学生たちを目の当たりにした私が、彼らに届けたいと思ったもの。そして、確実に1年前と異なる自分の物の見方や考え方に、自分自身が一番救われたということ、書きたいと思います。

## 13◆見本原稿

2015年4月5日。

新潟県新潟市にある「内野（うちの）」という駅で、私は電車を降りた。

今頃、同い年の友達たちは、大学で4回目の1学期が始まるのを待っているのだろう。

私の右手には、大きくて赤いスーツケースがあった。数か月分の衣類や生活道具が入っている。

そう、今日からこのまちで暮らすのだ。

なんのために来たのか、何が得られるのか、正直なところまだわからなかった。

分かっているのは、ここに来ることを自分で決めたこと、明日からこのまちでの毎日が始まることだけだった。

改札を出ると、窓から駅前の商店街がちらっと見える。

ぐっと顔を引き締めて重い荷物と共に階段を降りながら、初めてこの地に来た5か月前のことを、私は思い出していた。

その5か月前、つまり2014年の11月、私は研究室の調査実習で1週間、新潟県の村上市というところに滞在していた。私の研究室のテーマは、「日本の農山村の課題解決」。実際に農村を見て地域で活動している人に話を聞き、課題を見つけたり新しい提案をしたりする

## 第12回出版甲子園

のである。

私はいつも、自分のやることを「まだよくわからないし理由は説明できないけど、おもしろそう！」という直感で決めてしまう。

タイへの留学を決めた時も、農学部に進学したときもそうだった。直感で決めるから、その後で予想外のことが出てきたりするのだけど、まあそれは仕方がない、と割り切っている。…時もあるし、悩むときもある。

それはどうでもいいのだけど、この新潟の調査実習があった時期にも私は「おもしろそう！」というものに直面していた。

それは、「地方の地域に関わること」である。

東京で21年間生きてきた私が、研究室をきっかけに見たのは、日本の地方地域にかかわっている人たち、そこに生きる人たち。その人たちが、何やらすごく楽しそうで、かつこよくて、なんだかワクワクしてしまったのだ。

「もっと長く関わってみたいなあ…もっとそばで見たいなあ…」

そんなふうに思っていた。

1週間の調査実習が終わった最終日。

果てしなく長い聞き取りと議論とプレゼンづくり、そして集落の人との飲み会を終え、私は研究室の皆とは違う方向の電車に乗っていた。

行き先は、ある小さな本屋。

「せっかく新潟まで来ているんだし、どこか寄って帰りたいなあ。」

そう思ったとき、「新潟で本屋をやっている」という人に以前、東京で出会っていたのを思い出したのだ。

フェイスブックで友達になっていたので連絡をしてみると、来ていいよ、とのことだった。

「泊まる場所もなんとかするから、泊まっていきなよ。」

なんとかするとは、すごい本屋だなあ…と思いながら、内野と書いて「うちの」と読む小さな駅で降りる。

本屋は駅のすぐ目の前だった。もう日が暮れかけている。

「こんにちはあ」

ドアを開けると、小さな丸いテーブルを何人もの人が囲んでいるのが見えた。

照明はほんのりオレンジで、本棚もテーブルを囲んだ人も、あったかい色に包まれていた。

「あっ、いらっしやい〜こっち来なよ〜」

東京で会って以来会う、真っ赤な服を着たその人の前には、なんと日本酒が置かれていた。

聞くと、実は私が入ってきた時間で今日は閉店らしい。そして今日は閉店後に小さな飲み会をやるとのこと。本屋での飲み会なんて、初めてだ。

飲み会の参加者は、5人ほどだった。近所で働いてるお兄さんに、新潟大学3年生の女の子

## 第 12 回出版甲子園

に、私みたいに東京から来ていた女の子もいた。

家のこたつで飲み会をしているような、なんともゆるくて気ままでリラックスした飲み会に、私はいつのまにか安心しきっていた。参加している人たちも優しくていい人たちばかりだ。お土産に持ってきた赤カブ漬けが人気なのもうれしかった。

そんな中、真っ赤な服の店長が最近のことを聞いてきたので、私は「地方の地域に長く関わりたいと思っていること」などを話した。

「そうか～」

店長はちょっと考えているような顔をしながら私の話を聞いていた。なんだろう、否定されるのかな、と思いながら話したけれど、特に否定はされなかった。

「さてそろそろお開きにしよう」

気が付くと、私は新潟大学 3 年生の女の子の家に泊まることになっており、次の日は朝 5 時半に車で畑に行く段取りになっていた。

次の日、頑張って朝早く起き、車で 30 分ほどのところにある古民家に向かった。ここで毎週日曜日、畑の野菜とかまどのごはんで朝ごはんを食べる会が開催されているらしく、私たちもそれに参加したのだった。

古民家は茅葺でとても大きく、置いてあるたんすや時計、農機具など全部がここのあたりの生活を物語っていて、すごく素敵だった。

私たちの他の参加者も若い人たちで、気さくでいい雰囲気の人たち。初対面だけれども、一緒に畑から野菜をとったりごはんを作ったりすると、緊張せずに話せるのが不思議だ。

きん、と冷えた朝の空気にあったかいネギの味噌汁と白いごはん、それにふんと香るいろいろの炭のにおいになんだか本当に満たされてしまった。

「ゆきちゃん、バスがあるんでしょ、帰るよ～」一緒に参加していた本屋の店長が私を呼んだ。

東京へ帰るバスを予約してしまっていた私は、朝ごはんが終わると古民家をあとにしなくてはならなかったのである。時間はまだ午前 9 時半ごろ。なんて充実した朝だ。

帰りの車の窓から、すがすがしい朝の新潟の景色が見える。

そこで、運転していた店長は私に言ったのだ。

「ねえ、内野で米屋、やらない？」

すべては、この一言がはじまりだった。